

◇研究ノート◇

智慧と慈悲 (承前No. 2)

——法華經にみる智慧と菩薩行——

町 田 是 正

一九七九年に始まった東西靈性交流（日本仏教界と西欧キリスト教界との実践交流）に当って、再三招聘されてきた。その縁で一九八八年七月・上智大学で四日間開催された「Dialogue Symposium: Wisdom and Compassion—The message of Buddhism and Christianity for times」にも招聘され末席に列する機会を得た。内外研究者の（英・米・仏・独・印・比・豪・日）の英智にあふれた研究発表と討議を聴き触発されることが多かった。

大乗仏教の根本とされる智慧と慈悲の問題については、夙に先学によって語り尽されていると云える。中村元博士の「慈悲」（サーラ叢書）はすぐれた啓発書として知られている。私は先のシンポジウムに参加して、「智慧と慈悲（菩薩行）」について覚え書きしておいた。その備忘メモを頼りながら本誌（63・64号）をお借りして研究ノートの形で纏めてみた。

目 次

- 一、プロローグ—仏智慧とは——
- 二、法華菩薩行と比丘僧団
- 三、法華經にみる智慧の語彙
- 四、エピソード—智慧の実践——
- (1) 外国語の記号は、英語は（E）・ドイツ語は（D）・サンスクリットは（S）で示した。

智慧と慈悲（町田）

(2) 本文に煩瑣なまでにルビを付し、注記をもって補説した。

一、プロローグー仏智慧とは――

※「智慧」の語意については先63号を参照されたい。

法華經の教えには三つ特色があるとされている。(一)は、「開權顯實」（開三顯一・會三歸一）の言葉で示される思想です。

方便品に於て

十方仏土中・唯一乘法・無二亦無三・除仏方便説……………

我有方便力・開示三乘法・一切諸世尊・皆説一乘道・今此諸大衆・皆除疑惑・諸仏語無畏・唯一無二乘……………

（坂本・岩本訳註「法華經」上巻・一〇六・一一〇頁）

と説示されているところです。声聞には四諦を、縁覺には十二因縁を、菩薩には六波羅密を説いて、三乗各別に行果を得させるしていますが、実はそれは善巧方便であって、三乗はすべて平等に「會三歸一」とするという一仏乘思想の展開であります。

(二)は、「（法華が「法華義記」(八巻)で定奪し、智顗が「法華文句」で本門を当てた）開近顯遠」の言葉で示される久遠実成思想の展開です。

例えば如来寿量品に於て

我成仏已来・復過於此・百千万億・那由他・阿僧祇劫・自從是来・我常在此・娑婆世界・説法教化……………

我成仏已来・甚大久遠・寿量無量・阿僧祇劫・常住不滅・諸善男子・我本行菩薩道・所成壽命・今猶未尽・復倍

上数……

(坂本・岩本訳註「法華経」下巻一四・一八頁)

と説示されている。明らかに悠遠な無始無終の本仏の生命いのちの存在、久遠の人格的生命を説き顯わしています。

(三)は、法師品から囑累品に至る諸品に於て、菩薩行の思想が勸説され、現実の人間の実践が強調されていることである。

私は右の三つの特色の中から、特に智慧と菩薩行の説示を抜き出して考えてみたい。この事は法華経の原語である「Saddharma-puṇḍarīka-sūtra (s)」の「Puṇḍarīka」の語が象徴的に示すように、泥中に蘗郁と咲く「白蓮華」のごとく、娑婆の現実のなかで清浄の人間でありたいと誓願すること、そして実践することが勸説されています。さて先述のごとく方便品では「会三帰一」の思想を懇説します。

十方世界中・尚無二乗・何況有三……

十方仏土中・唯有一乘法・無二亦無三・除仏方便説

(坂本・岩本訳註「法華経」上巻九八・一〇六頁)

この説示によれば、三乗教が否定され「一仏乗が開会されています。(唯一統の悟りに至る道)一仏乗の乗物は我々の身近かに置かれているという感をうけます。然し実は「一仏乗Saddharma-eka-yana(s)」に至る道程は遙るか遠く、また一仏乗の「仏智 buddha-jñāna (s)」に至る旅路も遙るかなのです。寿量品の偈頌の中に「壽命無數劫・久修業所得」と語り、本仏自らが永劫の菩薩行の結果さとり得た智慧だとしています。

また仏智慧が甚深無量・難解難入であることについて、方便品の「長行 gadya (s)」と「偈頌 gāthā (s)」に

智慧と慈悲(町田)

於て總説されるところです。

告舍利弗・諸仏智慧・甚深無量・其智慧門・難解難入・一切声聞・辟支仏・所不能知……………

假使滿世間・皆如舍利弗・（心にかけて願ひ求めても仏智慧は測り知ることはできない）尽思共度量・不能測仏智・正使滿十方・皆如舍利弗・及余諸弟子・亦滿十方刹・尽思

共度量・亦復不能知……………

新発意菩薩・供養無數仏・了達諸義趣……………

一心以妙智・於恒河沙劫・咸皆共思量・不能知仏智・不退諸菩薩・其数如恒沙・一心共思求・亦復不能知

（坂本・岩本訳註「法華経」上巻・六六・七二頁）

方便品の長行では、二乗に向つて「仏智慧」は甚深無量（*gambhīra amita (s)*）。難解難入（*gaurāsaṃ duranubodhan (s)*）だと説き、偈頌に於ては一切の声聞の智を集めても、又一切の縁覚の智を寄せ集めても、さらには新発意菩薩の智慧を集めても、不退菩薩の智慧をもつてしても、とても測り知ることとは出来ない程に深遠で難解だとしている。※

※方便品で「無有餘乘若一若三」（上巻九〇頁）・「唯有二乘法無二亦無三」（上巻一〇六頁）・「終不以小乘濟度於衆生」（上巻一〇六頁）と繰り返して説示されてみると、声聞・縁覚の「小乘hinayana」は文字通り「劣った乗物」「下劣の乗物」の如くに解され、「劣等 inferiority (E) . die Minderwertigkeit (D)」の乗物という差別感を覚えます。竺法護は正法華経で「*hinayana*」を「下劣乗」と文字通りに訳しています。然し方便品で強調する「会三帰一」思想を踏まえて思考すれば、法華経は決して声聞・縁覚を下劣・劣等の無智者と差別してはおりません。「方便品」（巧妙な説示）の章節名が示す通り、まさしく二乗三乗の比丘僧団を法華一仏乗へと摂入するための「善巧方便 *upāyakaṃsaḥ parivarta (s)*」なのです。法華菩薩団は、声聞・縁覚を差別して見たのではなく、彼の僧団が余りにも煩瑣な教理に拘泥し知識過剰・自慢過剰

となり、その結果、思考が保守固定化され、小乗教団自らが進歩する道を閉ざしていたことに警鐘することが「会三帰一」(善巧方便)の本意であったと思われる。

方便品では、「四仏知見」を説示した後段に入ると、ガラリと説相が変わります。

是法皆為一仏乘故・是諸衆生・從諸仏聞法・究竟皆得・一切種智……

(坂本・岩本訳註「法華經」上巻・九〇・九二・九四・九六頁)

という、右掲の同一説示の語を以って、前後五回にわたり仏智慧に至る保証がされます。(會三帰一)從諸仏聞法・從仏聞法・

そして未来の如来たちから正法を聞いて一切種智を得たとするのです。仏智慧に至る道程は遠く、甚深無量であろう

とも、しかし会三帰一の保証が与えられているのであれば、我々は菩薩行を厭うことなく真摯に仏智慧を求めていきたいものです。

二、法華菩薩行と比丘僧団

大乘仏教の主役を演じたのは、「菩薩 bodhisattva (s)」と呼ばれた「徳のすぐれた修業者」「求法者」であり、その集団「菩薩団 bodhisattva-gana (s)」と称せられた「求法団」であった。龍樹の『十住毘婆沙論』(羅什訳)の中に、

菩薩衆者・為無上道・發心名曰菩薩……

(大正蔵二六卷(一)の二二頁上)

とあり、殊に「無上道 anuttara (s)ニ發心シテ」と論説することく、菩薩に対しては、「菩提心 bodhi-citta」

智慧と慈悲(町田)

智慧と慈悲（町田）

〔上求菩提・下化衆生〕
〔六波羅蜜の實踐〕
「菩薩行 bodhisattva-carya」・「菩提行 bodhicarya」の保持と慈悲利他の実践が強く求められています。※

法華經諸品で「bodhisattva-gana」を表現する場合、羅什訳「妙法蓮華經」では、表現の語彙に微妙なニュアンスがみられる。即ち(1)・法華菩薩團(衆)が小乘比丘僧團と同時に登場(同席)するときには「菩薩團(衆) bodhisattva-gana」とは云わないで、「諸菩薩(菩薩達) bodhisattva」⁽¹⁾と複数形で表現されている。(2)・次に見宝塔品とか從地涌出品の菩薩團を表現するときには「菩薩衆」(法華經中卷二九・二九四・三三四頁)とか「衆菩薩」(法華經中卷二七八頁)としている。宝塔品と涌出品に登場する求法団を特に「菩薩衆」と表現していることは、両品に登場する菩薩が特別に滅後の弘教を委嘱されたことを示唆しているよう。尚、「從地涌出 prthivi-vivarebhya unmajjantam (s)」(大地の割れ目から出現した)という表現は、永い間にわたり仏教団の底辺にあって、表面に出ることのなかった法華菩薩團が強大な求法団となって出現した歴史事実を象徴的に語っているよう。

紀元一世紀大乘菩薩團は、元來、比丘僧團^{サンガ}と菩薩團^{ガナ}の結束として機能していた「仏塔崇拜」を否定して、新たに菩薩衆^{ガナ}の結合の運動として、大乘經典の「結集 Sangati (s) . die Redaktion (D)」と、結集した經典の教えに準拠して修行を展開していった。『摩訶般若波羅密經』の結集は大乘仏教の先駆的役割を果し、就中、西北インドに於ける『法華經』の結集は、菩薩ガナの革新的運動として注目に値します。

法華菩薩ガナは建塔供養を否定する立場をとりながら、法華菩薩ガナ独自の求法の運動を確立していった。「分別功德品」中に次の説示がみられます。

如来滅後・若有受持誦誦・為他人説・若自書・若教人書・供養經卷・^{(遺骨塔を建立する必要もなく)(僧の集団へ供養する必要もない)}不須復起塔寺・及造僧坊・供養衆僧・
況復有人・能持是經・兼行布施・持戒・忍辱・精進・一心・智慧・其德最勝・無量無辺……疾至一切種智……

(坂本・岩本訳注「法華經」下卷六〇頁・併せ五八頁参照)

(相違の区別の意)

この分別の功德品の説示は、明らかに「僧団供養 Saṃgha Puja (s)」と「仏舍利塔 dhātustupa (s)」建塔を否定することを示している。今の私達の供養觀念からすれば奇異の感を覚えます。菩薩ガナの結束と修行法として、五種法師・六波羅密の実践に努め、菩提の覺智に至る智慧を磨くことを勧説します。※

※分別功德品は「不須為戒・復起塔寺・及作僧坊」・「不須復起塔寺・及造僧坊・供養衆僧」と説き、仏塔崇拜と僧供養を否定していますが、然し同品は他処では「若人説誦・受持是經……復能起塔・及造僧坊・供養讃歎」(「法華經」下卷六頁)とあって塔崇拜と僧供養を讃歎している。即ち分別功德品は否定と肯定の説示を同時処で行っており、二律背反の矛盾説示であります。又、建塔供養については、神力品に於て「若有受持・説誦・解説・書寫・如説修行……園中・林中……若山谷曠野・是中皆応・起塔供養・所以者何・当知是處・即是道場」(「法華經」下卷一五八―一五九頁)とあって起塔供養を勧めている。分別功德・神力兩品の説示を再読してみると、建塔供養をやみくもに勧め讃歎しているのではなく、五種法師を如説修行する処が道場であり、その道場に塔を建て崇拜供養をなすとしており、菩薩行の実践を勧めていることは明らかです。

法華菩薩ガナは小乗比丘僧團とは対立するところとなりましたが、菩薩ガナは寛容と有和の態度で接する事に努めました。然し比丘僧團側から驚異の目で見られ、時には怒号・非難・迫害を加えられる事がありました。

勸持品二十行偈のなかで

有諸無智人・惡口罵詈等・及加刀杖者。我等皆當忍……………惡鬼入其身・罵毀毀辱我・我等敬信仏 當著忍辱鎧……………遠離於塔寺・如是等衆惡・念仏告勸故・皆當忍是事

(坂本・岩本訳注「法華經」中卷 三六・二三八・二四〇頁)

と示して、惡口 parusa・罵詈 akrośa tarjan・刀杖 danda の言葉をもって、菩薩団に対する迫害の激烈さを表現している。その迫害に対して忍辱 kṣanti の鎧をまとい、忍辱の衣を着けて忍耐しなさいと勧説します。「忍辱 pie

智慧と慈悲（町田）

忍ぶことが第一）
Beharrlichkeit (D)」は六波羅密の一行であって、（呻吟して痛みと苦に耐えることが、悲と慈の基になる）忍辱心は慈悲の大作となるとされている。

次に法華菩薩団と比丘僧団との対立を具体的に示す事例として、方便品に於ける五千起去の現象が示されます。

亦時世尊・告舍利弗・汝已厭黷・三請・豈得不説・汝今諦聴・善思念之・吾當為汝・分別解說・説此語時・會中有比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・五千人等・即從座起・礼仏而退・所以者何・此輩罪根深重・及増上慢・未得（得て）ないものを得たと思ひ、達成してないものを達成したと思ひ）謂得・未證謂證・有如此失・是以不住・世尊默然・而不制止。

（坂本・岩本訳注「法華經」上巻八六頁）

この「五千起去」の説示は、比丘僧団の「増上慢 adhimāna (s) die Eitelkeit (D)」を強く咎め、法華菩薩団が堅持してきた寛容 die Großmut (D) と有和 die Versöhnung の態度を変えて、自憍僧団は避けようとしている。ところで、方便品の説相の順序に従えば、五千起去の前段に於て「三請三止」の応答では軽々に法華一乗の説法は出来ないとしている。

舍利弗・如是増上憎人・退亦佳矣・汝今善聴・當為汝説

（坂本・岩本訳注「法華經」（方便品）上巻八八頁）

方便品は三請三止・五千起去というドラマ的説相をかりて、自憍比丘の保守性・狹量性・不寛容・自憍性を強く咎めています。しかし、法華経は比丘サンガを咎め批判はしますが、これを敵対視するものではありません。五千起去のドラマ的説示は、まさに「金三帰」のための善巧方便であって、実は十方世界に於ける存在の真相 dharmata (s) と、仏出世の義務 karaṇya (s) をして目的 kṛtya (s) を明らかにしようとしたもので、法華菩薩団が比丘僧団に対抗した勢力として歴史上に登上したことを示しています。

法華經菩薩者に対する迫害の事例として、常不輕菩薩の「但行禮拜」の説示が知られている。この常不輕の禮拜行に対して

常作是言・汝等作仏・說是語時・衆人或以・杖木瓦石・而打擲之・避走遠住・猶高唱言・我不敢輕於汝等・汝等皆當作仏

(坂本・岩本訳注「法華經」下卷二三頁)

と示され、嘲笑を浴せられ、杖木による危害の加えられたことが語られている。不輕菩薩品で「我深敬汝等……」と説かれている「汝等」の範圍は、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・又は四衆・衆人・諸人・と呼ばれる人々で、

(他の教えを語る者・沐浴場・靈場をつくる人)

「外道 anāgati tika (s)」の語は見当りませんが、常不輕が但行禮拜した対象は、僧団比丘衆だけではなく仏教

以外の教えを語る者も多く居たと思われる。

(純粹性)

また、法華菩薩ガナは教団の独自性と修行を堅持するために、教団自体が孤立の状態になることを覚悟しても他教

団との交際、(他の教えを説く者・大乗經典では邪見の意がこめられ貶称のニュアンスが強い)外道 tithakara (s)との語り合いを固く止めています。安樂行品には菩薩ガナの交際を不可とする

(不親近)

範圍(種姓と出生・職業)が細かく列示されている。

菩薩摩訶薩不親近・國王王子・大臣・官長・不親近諸外道・梵志 バラモン 苦行僧 Brahmacharin・尼犍子 ジャイナ教徒 Nirgaṇṭha jatiputra、

及造世俗文筆讚詠外書及路伽耶陀 即世外道・感覺的唯物論者 Lokyata、逆路伽耶陀等・亦不親近諸有凶戲・相授・相撲及那羅等・又不親

近施陀羅・及玄猪羊鷄狗・毘睨漁捕・諸惡律儀・如是人等・又不親近求声聞・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・

亦不問訊・而為説法・亦不樂見・若人他家・不與小女・処女・寡女等共語・亦復不近・五種不男之人・以為親厚

詐欺師

去勢された不具者

・不独入他家……

古代インドに於ける「種姓 Varṇa」と「出生 jāti」の悉んどが列記されています。列記されている「カースト」に対して、不親近・不入・不問訊・不独入と説いて、法華菩薩ガナの活動範囲を規制限定している。但し、交際禁止者の中には商業者と富裕資産家が除外されており、法華菩薩団の経済的スポンサーであったことが知られます。
（主）に貿易に従事した資産家
 （各カースト（ジャーティ）には職業道徳・結婚・他カーストの交際・宗教行事の参加など独自の規範慣行があった。）

さて安樂行品の説示によれば、集团的身分制とか職業の貴賤・種別に関わりなく、法華菩薩ガナは交際する範囲が「不親近」と厳しく規制され、菩薩ガナ自身が交際範囲を限定して孤立化していったことを想像させます。然し菩薩団は孤立化することを慮れないで、あえて「不親近」と交際範囲を限定したのは、文字通りに「不親近」を強調したのではなくて、当時、種姓や出生によって差別されていた社会制度を否定しようとしたのではなかったか。すべての身分集団と「不親近」の立場を明確にすることで、我と汝・我と彼という彼我の差別・社会差別を打破し、すべて平等であるべきことを説示しようとしたと思われる。

三、法華経にみる智慧の語彙

大乘仏教では「修すること sich kasteine (D)」を強調します。部派仏教時代の「業 karma (s)」の観念を「行 carita (s)」の言葉に置き変えて、菩薩行と呼ばれる「修行 ascetic practices (E)・die kasteiung (D)」を確立していった。菩薩行を修する上で特有の実践倫理がなくてはなりません。その徳目として勧説されているのが、「五師法師 pañca-dharma-bhāṇaka (s)」と「六波羅密 sat-paramitah (s)」です。

五種法師と云えば、法師品・分別功德品・法師功德品・不輕菩薩品・如來神力品に於て説示され、特に法師品の

中巻・四八頁

説示が知られている。法師品で五種の法行が勧説されるのは、その法行を修することが「智慧」(一切種智慧)に至る要諦であるからです。

(「法華経」上巻・二二頁) (「法華経」下巻・六〇頁)

次に六波羅密行については、方便品・分別功德品に於て説示され、殊に分別品ではそのその功德が讃歎されている。六波羅密の実践は「最高の悟りに至る道 Parama bodhimarga (s), das Heispfad (D)」とされています。

(上波羅密・不化衆生)

およそ菩薩行は、自利利他の願行を標榜することです。新らしい仏教人間像の形成を目指しています。さらに云えば、菩薩行は一切衆生を利益せしめようとする「廻向 Parinama (s), Merittransference (E)」でなければなりません。※

※廻向(回向)……世間的に解せられている「仏事を営み死者の冥福を祈る Prayer for the dead (E)」という廻向は、大乘菩薩行が目指す廻向の意ではありません。菩薩行では自己の善行(六波羅密行)の功德を自己の功德とするだけではなく、廻向を受ける対象を一切衆生に振り向けることで完全な功德とします。

法華経諸品にみる智慧

- (1) 使用テキストは坂本・岩本訳注「法華経」全三巻・岩波文庫
- (2) 智慧の語彙は筆者の取捨選択による。
- (3) 引用した経説の意味を強めるときは、岩本博士のサンسكريット訳を参照してルビとして付した。

序 品

智慧と慈悲(町田)

智慧と慈悲（町田）

為諸菩薩、說應六波羅密、令得阿耨多羅三藐三菩提、成一切種智※（上卷四〇頁）

※「一切種智」とは、一切智・道種智・一切種智の三智の一つで、智慧を段階別に分けたもの。一切智とは一切事衆のすべてを知る声聞・縁覺の智、道種智とは一切衆生の差別を知り尽す菩薩の智、一切種智（sarvajñā）一切を知るものの境界」とは一切事衆の全体像と個別像を知り尽す智で、平等と差別を合せ知る仏智のこと。方便品「究竟皆得、一切種智（上卷九二頁）、菓草喻品「究竟至於・一切種」（上卷二七〇頁）、法師品「其有欲疾得・一切種智慧」（中卷一四八頁）の説示も同意です。竺法護は正法華經で「諸通慧」と漢訳している。智顗は法華義疏卷九において「一切種智ハ有ヲ照ラス智ナリ。慧トハ一切智ニシテ空ヲ照ラス慧ナリ」と訳している。

方便品

諸仏智慧※・甚深無量・其智慧問・難解難入・一切声聞・辟支仏……………

無問而自説・称歎所行動・智慧甚微妙・諸仏之所得…………（上卷六六・七八頁）

※「仏智慧」……大乘經典で説示される仏の智慧の総称。又は大乘仏教の一切の教え（諸相）を総括的に表現したもの。方便品では甚深無量・難解難入・尽思共度量不能測仏智としている。仏智の難解については既に一節プロローグで言及しているので此処では省略する。譬喻品の項を併せ参照。

余の拙目の智慧の力で、信心の意向と心の動きを知って 方便説諸法・皆令得歡喜…………

舍利弗當知・我以仏眼・觀・見六道衆生・貧窮無福慧・入生死險道・相續苦不斷（上卷二〇・二二三頁）

※「仏眼」…五眼（諸仏の具える肉眼 *maṇsa-cakṣus*・天眼 *divyaṇī-c-* 慧眼 *prajñā-c-*・法眼 *dharma-c-*・仏眼 *buddha-c-*）の一つ。仏眼とは諸法の実相を照らし明かにする仏の眼のことをいう。仏眼という洞見の世界に達するためには自利利他の実践（例えば譬喻品に説く「皆久殖徳本・淨修梵行・常修仏慧・志念堅固」（上卷四八頁）に努めることが要請されている。

譬 喩 品

若有衆生・從仏世尊 聞法信受・勤修精進・求一切智・仏智・自然智・無師智・如來知見・力無所畏・愍念安樂・無量衆生・利益天人・度脫一切・是名大乘・菩薩求此乘故・名為摩訶薩（上卷二七八頁）

※「一切智sarva-jñāna (s)」…「完全な智慧を有する者・すべてを知っている人」の意。すでに序品・方便品等に出自した語彙ですが、此處で法華菩薩の実踐を踏まえて言及すれば、本来「一切智」は「如來の智慧 taṭhagata-jñāna-darsana」のことでしたが、譬喩品に至って「一切智 sarva-jñāna」と呼ぶことで、從來まで比丘僧団に入り修行しなければ得られないとしていたものを、菩薩団の登場することで「一切智」をすべての人々（平凡な市民）にまで拡大し開放したのでした。この開放の事は方便品の開示悟入の説示と、譬喩品の「皆是我有・其中衆生・悉是吾子」（上卷一九八頁）の説示が教える如く、仏の普ねく慈悲を基にして一切衆生が仏智に導かれることを示唆しています。

※「仏智 taṭhagata-jñāna」…「摩訶般若波羅密經」（大品般若經）の第廿一・三慧品に智慧の種類を示して「爾時須菩提白、仏言、世尊說一切種智。仏告須菩提。我說一切種智須菩提言。仏說一切智。說道種智。說一切種智。是種智有何差別。仏告須菩提。薩婆若是一切声聞辟支仏智。道種智是菩薩摩訶薩。一切種智是諸仏智。」（大正藏八卷（二）三七五頁中段）とあります。智頭の法華文句では(1)「仏之智慧」を「一切智」に配して、空を照らす智、一切の事象を總体相としてとらえ、それらが等しく空であり個別相と知る智慧としている。(2)「如來之智慧」を「道種智」に配して、差別を照らす智慧としている。(3)「自然之智慧」を「一切種智」に配して、「一切を知り尽した智 sarva-darśa-jñāna」となし、空有を並べ照らす智・つまり仏智慧としている。法華經囑累品の「亦無所畏・能与衆生・仏之智慧・如來智慧・自然智慧・如來是一切衆生・之大施主」（下卷一六八頁）の説示も同意の教えでありましょう。

授 記 品

フツタの智慧を求め 純潔を守り修行する 人間の最勝者たちに供養して この最高の智慧を得て比類のない偉大な聖仙となろう
為仏智慧・淨修梵行・供養最上・二足尊已・修習一切・無上之慧・於最後身・得成為仏（上卷三〇二頁）

智慧と慈悲（町田）

智慧と慈悲（町田）

五百弟子受記品

又於諸仏・所説空法・明了通達・得四無礙智・常能審諦・清淨說法・無有疑惑・具足菩薩・神通之力（中卷九四頁）

※「四無礙智 catuṣprāśamvid」…「無礙智」は化城喻品にも出自するところだ。「無礙智 anāvaraṇa-jñāna」（妨げられることのない智慧）の意で、仏はその自由自在の智慧を四種類もっているとする。(1)法無礙智：教法に関し精通し自在の能力。(2)義無礙智：教法の内容理解に関し精通し自在の能力。(3)辞無礙智：言葉の表現力に関し自在の能力。(4)弁無礙智：正しい道理に基き衆生に教える説くことが自在の能力。（衆説無礙智）「四無礙慧」（中巻一〇四頁）の語も同意に解せられる。

安樂行品

忍の力をもち理智を尊高に蓄えている。機み深い余は教えにより一切世間を統治する。

如来亦爾・為諸法王・忍辱大力・智慧宝蔵・以大慈悲・如法化世……遊行無畏・如師子王・智慧光明・如日之照（中巻二七六・二七八頁）

日蓮宗学の弘教法軌に則して安樂行を解釈すると、「安樂行 sukha-vihāra (s)」という実践は「摂受」の態度と解されている。一方、勸持品の「勸持」の実践は「折伏」の態度を表現していると解せられている。

さて筆者のように日蓮宗徒であって宗学者ではない者の立場からすると、勸持・安樂の両品を折伏・摂受の經典なりと類型づけることに疑問を持つのです。なぜかと云えば、「勸持 ushāra (s)」は、努力・抑制・精勵・忍耐の意で「經典を持つことを勧める」語です。ですから二十行偈中で「我等敬信仏・當著忍辱鎧・為説是經故・忍此諸難事」（中巻三八頁）と説示して、「尊敬心 gauraveṇa」をもって「困難な仕事 su-ṭuskara」を「忍んで努力 usahama」することを強調します。他方、安樂行品でも「白仏言、世尊、是諸菩薩、甚為難有、敬順仏故、発大誓願、於後惡世、護持誦誦、説是法華經」（中巻二四頁）とあって、「甚為難有」（極めて困難な仕事 Parama-duṣkara）・「敬順仏故」（尊敬の念 gauraveṇa）・「発大誓願」（忍んで努力 uttadha）が強調されており、明らかに勸持品偈と共通した用語で表現されている。折伏行とか摂受行という類型に分け

る必要はなく法華菩薩行の原点として享受すべきであります。

從地涌出品

如来の智慧は思考を超えている。

心を統一して安住せよ

勿得有疑悔・仏智已思議・汝今出信力・住於忍善中・昔所未聞法・今皆當得聞・我今安慰汝・勿得懷疑懼・仏無余の智慧は決して教えきれない
深遠な教えは思索を超えて測る境地もない

不実語・智慧不可量・所得第一法・甚深区分別・如是今當説・汝等一心聴（中巻三〇八頁）

地涌の四菩薩：上行・無辺行・淨行・安立行の四菩薩について、涌出品には、(1)「最爲上首・唱導之師」（中巻二九二頁）、(2)「皆是大衆・唱導之首」（中巻二八六頁）とあり、サンスクリット原本（萩原本）によれば、(1)「上首唱導之師」については、「大いなる菩薩の集団 bodhisattva-gaṇa」又は「大いなる菩薩の団体 bodhisattva-rāṣi」の「指導者 Pramukha」と呼ばれている。(2)「大衆唱導之首」は、「集団統卒者 gaṇin」又は「大集団統卒者 maha-gaṇin」の「集団の師 gaṇa-acārya」と呼ばれている。

サンスクリット原本によれば、地涌菩薩の性格を「教団 gaṇa」の指導者層（最高指導者）としています。この表現は、小乗僧伽に対して法華菩薩団の優越性を示したものと云えましょう。唱導之首としての四菩薩は、法華經の描く理想の人間像であり、大衆中から抜き出たエリートなのです。然し大事なことは、いつの時代でもエリート (elite) は大衆から遊離し、自惚れ、傲慢で実践することを怠り勝ちです。そこで法華經では此の事を優慮して、エリート菩薩団が大衆から隔絶しないようにと、分別功德品から常不輕菩薩品に至る諸品で法華弘通の広大な功德を説き、受持信行と弘教を勧奨して菩薩行の在り方を制誠しているのです。

常不輕菩薩品

彼にサダー・パリフータという姓名をつけた。この正しい教えの白蓮という経説を宣揚した。

号之爲常不輕・是比丘……廣為人説・是法華經・於時増上慢四衆・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・輕賤是

人・爲作不輕名者・見其得大神通力・樂説辯力・大善寂力・聞其所説・皆信伏隨從（下巻一三六頁）

※「常不輕」のサンスクリット原語は「Sada-parihūta」で、鳩摩羅什は「常不輕」と漢訳し、竺法護は「常被輕慢」と訳し

智慧と慈悲（町田）

て、羅什とは反対の訳語を当てている。

羅什により「常不輕」と訳経されることで、同品中の「我深敬汝等・不敢輕慢・所以者何・汝等皆行菩薩道・當得作仏」（下卷一三三頁）の二十四文字が特別に教學的意義をもつところとなり、殊に日蓮聖人により「略法華經」と名付けられ、法華菩薩行の規範とされました。聖人は「寺泊御書」において「法華經三世說法儀式也。過去不輕品今勸持品、今勸持品過去不輕品也。今勸持品未來可為不輕品。其時日蓮即可為不輕菩薩」（昭定遺五一頁）と示して、不輕菩薩の但行礼拝行と御自身の忍難色説とを照合して、法華經行者の自覚を深められている。

「常不輕 Sada-paribhuta」の訳出について……原語の「sada」は「常に」の意。「paribhuta」は「輕蔑された」の意ですから、竺法護が「常被輕慢」と訳したのが正しい。然るに名訳経者の羅什は、「被」（～された）を「不」（否定 akaraṇa）の意に訳しました。

さて羅什は「不」（a）という否定詞を用いることで（Sada-paribhuta）を「Sada-aparibhuta」としたと思われるのですが、然し原語をみるかぎり「a-paribhuta」を「不輕」（かろしめず）と訳すことには無理があります。即ち「常不輕」は「常に他人を輕蔑しない」の訳経の型で慣用されてきましたが、「paribhuta」は過去分詞で受身の形ですから「輕蔑された」の意になります。従って否定詞「a」を付しても「輕蔑されない」という受身の形であって、絶対に「他人を輕蔑しない」という能動的な意は出てきません。然るに羅什は文法的な誤りを犯してまでも「被輕慢」を「常不輕」と訳しました。この事は羅什が単なる訳経者ではなくて、法華經の精神を發揚しようと努めた心意気によるものと理解したいのです。

また竺法護により「常被輕慢菩薩」と訳されたのを、羅什が「常不輕菩薩」と訳すことで、不輕菩薩が從地涌出品の「唱導之首」と仰がれるエリート菩薩ではなく、社会の底辺で汗した忍難求法の修行菩薩者であったことを示しています。法華經の結集者（編者）は、地涌唱導のエリート菩薩像と対照的な人間のな不輕菩薩を説示することで、慈悲行の実践と智慧の開頭を強調しようとしたと思われます。

親世音菩薩普門品[※]

真觀清淨觀・廣大智慧觀・悲觀及慈觀・常願常瞻仰・無垢清淨光・慧日破諸闇・能伏災風火・普明照世間・悲体

戒雷震・慈悲妙大雲・澎甘露法雨・滅除煩惱焰・諍訟經官処・怖畏軍陣中・念彼觀音力・衆怨悉退散（下卷二六頁）

※「觀世音菩薩 avalokiteśvara-bodhisattva」……サンスクリット原意は「觀察することに自在な求法者」です。「觀avalokita」と「自在isvara」に分解できる語で、玄奘は「觀自在菩薩」と漢訳している。「觀自在」とは一切の諸法を觀察するのと同様に、衆生の救済も自在であるという意。「觀世音」とは世間（衆生）が救いを求めると直に救済する意（「svara」は「音」とも訳されているので、avalokita-svara」を觀音」「觀世音」と訳し得る）。「觀音」と称するときは大悲を強調し、「觀世音」と呼ぶときは智慧を強調して漢訳されていると思われる。



法華經に於ける智慧の語彙について―筆者の取捨選択で―摘出を試みましたが、その結果、表現の方法、意味する内容、修行法において様々であることが解った。その表現法に於て、善入仏慧（序品）・通達大智（序品）・智慧甚微妙（方便）・常修仏慧（譬喻）^{（智慧を得ようとする意）}・仏智慧樂（譬喻）^{（仏の智慧という幸い）}・智慧深遠（藥草）・如來無礙智（化城）・四無礙智（五百弟子）・自然智（法師）・一切種智慧（法師）・智慧寶藏（安樂行）・智慧光明（安樂行）・深甚智慧（涌出）・智慧不可量（涌出）・慧光照無量（寿量）・思惟智慧（分別功德）・大善寂力（不輕）・功德智慧（藥王）・福德智慧（藥王）・廣大智慧（普門）等々、表現法は多様で、殊に仏智慧を指すときは最上級の形容修飾語を冠して説示しています。表現が様々だと云うことは、「智慧 prajña」と「仏智 buddha-jñāna」の意味する内容が限りなく広く深いことを示唆しています。

法華經に於て「仏智慧」を讃歎するとき、その表現法として、「甚深無量 gambhīram aprameya (s)」とか、「難

智慧と慈悲（町田）

信難解 durdīṣam duranubodham (s)」のように形容詞または副詞を冠し、或は叵思議・深遠・福德・不可量・不度量・無上などの副詞を冠して修飾し、仏智慧が微妙で、人の思惟能力を超え、限りなく深く清浄なることを強調している。智慧の「悟り」の本質とされるのは、この意によるからです。

法華経では智慧を得るための菩薩行として、例えば化城喻品の中で、

譬千の因縁を挙げ、譬百万の例話を用いて

神通力の智慧を發揮して、真実の修行を示した

菩薩者が行う通りに「正しい教えの白蓮」という

ガンジ

以無量因縁・種種諸譬喩・說六波羅密・及諸神通事・分別真実法・菩薩所行道・說示法華経・如恒又同の砂の数の無數の譬喩で
河沙偈（中卷八二頁）

と示し、仏は菩薩ガナのために、幾百万という説話を用いて、神通甚深の智慧を縦横に發揮して、智慧を得る実践法として「六波羅密」を教示勸説しています。

法華菩薩行の大事として、智慧の実践を強く勧めている。例えば從地涌出品に於て

阿逸汝當知・是諸大菩薩・從無數劫來・修習仏智慧・悉是我所化・令発大道心・……………・晝夜常精神・

幾千劫の間修行した 仏の智慧にしたがつて すべてを「さとり」に到達するよう成熟させた。

晝夜に怠ることがない

晝夜常精神

為求仏道故・……………・志念力堅固・常勤求智慧（中卷三一〇・三二二頁）

と説示し、実践としての智慧を強調している。そして寿量品中に「如実知見 yathā-bhūtam jñāna-darśana」と

示されて、仏智慧をもって現実の娑婆を洞見しようとする久遠仏の慈悲心を積極的に表現している。法華経にみる仏

智慧とは、（救済の昔（無始）から永遠の未来（無終）に向けて）

（隨機応変）

久遠本仏の智慧のことですが、大事なことは、この仏智慧は巧説方便して衆生救済の機能を果すことです。

超越的な久遠仏が、その智慧をもって此の娑婆の現実を如実に知見して、衆生救済のための必要な手段をなすと説示しているのです。

四、エピソード―智慧の実践―

我々は、法華經に説示されている仏智慧の意味について、質直意柔軟にうけとめることが大事でしょう。方便品のなかで

心にかけて願ひ求めても仏の智慧は知ることができない

盡思共度量・不能測仏智……

仏の智慧を心にかけて願ひ求めても仏の智慧は測り知られない

盡思共度量・亦復不能智……

鋭敏な理智で追究しても仏の智慧はかれらの理解を超えている

咸皆共思量・不能知仏智

（坂本・岩本訳注「法華經」上巻七二頁）

と繰り返して、人の智慧能力をいくら沢山集めても、仏智慧には及ばないと強調している。仏智慧は人の理智能力を超絶している。だとすれば、我々にのこされた唯一の道は、仏智慧について「あれやこれや one thing or another」
と思ひめぐらすのではなく、只ひたすらに仏智慧を願ひ求めて菩薩行を実践することに意義が生まれてくるのではないか。

（一九八八年七月）

私は過る年「国際シンポジウム・智慧と慈悲―仏教とキリスト教の現代的意義」（上智大学会場）に招かれて、各

国の英知が期せずして、理論としての愛（慈悲）と智慧ではなくて、実践としての愛（慈悲）と智慧を強く求めている

（環境破壊・経済格差・核兵器の脅威・生命倫理の破壊など）

た国際会場の雰囲気回顧するとき、現代の世界的危機を救う一つの方途は、地球的視野で踏まえた慈悲と智慧の実

践あるのみとの認識を強くしたのであった。

（一九九一年八月十一日稿）